

平成27年度

岩手県普及活動年報

平成28年5月

岩手県中央農業改良普及センター
県域普及グループ

はじめに

本県の農業改良普及事業に対しましては、生産者、関係機関・団体を始め多くの方々からご支援並びにご協力をいただいております。心から感謝申し上げます。

県では、「いわて県民計画第3期アクションプラン」の実現を目指し、地域農業の核となる経営体の確保育成や、消費者から信頼される生産性・市場性の高い産地づくり、農産物の高付加価値化などを推進しています。特に、平成27年度は、東日本大震災津波からの「本格復興邁進年」として、被災地の一日も早い復旧・復興を目指し、営農再開に向けた組織づくりや生産振興、放射性物質影響対策を進めるほか、県オリジナル水稻品種「銀河のしずく」の開発・普及定着による県産米のブランド化に戦略的に取り組んできました。

また、農業改良普及センターにおいても、担い手の確保や産地再生に向けた中長期的な課題の解決を「普及指導計画」に位置づけ、農業者と顔を合わせた普及指導活動を展開することにより、認定農業者や女性農業者などの担い手の確保育成、水稻新品種の作付実証、園芸・畜産の新技术普及、産地形成と生産性向上などに取り組んでいるところです。

一方、国においては、若者たちが希望を持てる「強い農業」と「美しく活力ある農村」の実現に向けて、平成27年3月31日に新たな「食料・農業・農村基本計画」を閣議決定したところであり、農業の成長産業化を促進する産業政策と多面的機能の維持・発揮を促進する地域政策を車の両輪として、施策を展開しています。加えて、昨年10月にはTPP協定が大筋合意されたため「総合的なTPP関連政策大綱」を策定し、農林水産物の重要品目が再生産可能となるよう、万全の施策を講ずることとしています。

まさに、このような時期だからこそ、普及組織が技術力、情報ネットワーク、コーディネート機能を発揮して、意欲を持った生産者や集落が、希望を持って農業に取り組み、地域農業・農村が将来にわたって維持発展できるよう支援することが重要と考えております。

本書は、各農業改良普及センターが平成27年度に取り組んだ普及活動のうち、主な活動成果の内容を集約し、広く紹介することを目的に取りまとめたものです。各地での農業・農村の発展に向けた活動の参考にしていただければ幸いです。

関係各位には、今後とも一層のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

平成28年5月31日

中央農業改良普及センター
所長 山舘忠徳

目 次

I	気象経過と農作物の生育概況	1
1	平成27年1月から12月までの気象概況	2
2	農作物の生育概況	7
II	普及指導活動の成果	17
1	「意欲と能力をもった経営体の育成」に対する支援	18
	新規就農者への事業計画の作成・実践支援	(中央圏域) 18
	集落営農組織の多角化による経営発展支援	(中央地域) 20
	認定農業者の経営管理能力向上支援	(八幡平) 22
	牛飼い女子グループ活動支援	(八幡平) 24
	果樹産地の維持・発展に向けた取組	(奥州) 26
	胆江地方ニューファーマー育成プログラムの推進	(奥州) 28
	胆江地域デイリーサポートチームによる次世代経営者の育成支援	(奥州) 30
	りんご若手生産者グループの育成	(一関) 32
	小ぎく新規生産者の育成支援	(一関) 34
	集合研修を中心とした集落営農組織の設立及び法人化	(一関) 36
	次世代を担う若手肉用牛繁殖農家への規模拡大支援	(一関) 38
	新規就農者の経営安定支援	(大船渡) 40
	関係機関との連携による新規就農者支援	(宮古) 42
	関係機関・団体連携による新規就農者定着支援巡回	(久慈) 44
	農業女子セミナー開催による若手女性農業者の経営参画支援	(二戸) 46
2	「消費地から信頼される産地の形成」に対する支援	48
	水稻新品種「銀河のしずく」(旧：岩手107号)の早期普及を目指して	(中央圏域) 48
	シュウリュウの普及拡大及びシストセンチュウ被害低減に向けた取組	(中央圏域) 50
	施設きゅうり栽培におけるセンチュウ等病害虫同時防除効果の確認	(中央圏域) 52
	リンドウ黒斑病の発生実態と効果的な防除方法の検討	(中央圏域) 54
	広域コントラ組織の作業効率化支援による飼料用トウモロコシの面積拡大	(中央圏域) 56
	醸造用ぶどう房枯症軽減実証	(中央圏域) 58
	転炉スラグを活用したハウレンソウ萎凋病被害軽減技術の普及	(中央圏域) 60
	劇団「ケンボク」初公演	(中央圏域) 62
	小麦新品種「銀河のちから」種子の安定生産について	(中央地域) 64
	二子さといもの産地活性化に向けた支援	(中央地域) 66
	いちご生産基盤の強化のための取組	(中央地域) 68
	新品種と地域資源(堆肥)を活用した大豆安定多収技術の普及	(中央地域) 70
	大豆の収量品質向上支援	(盛岡) 72
	「安代りんどう」の産地力強化に向けた取組	(八幡平) 74

ピーマンのかん水設備導入	（八幡平）	76
大豆新品種「シュウリュウ」の普及	（奥州）	78
地域をあげての防除活動実践による斑点米被害防止の取組	（一関）	80
ピーマン産地規模拡大支援	（一関）	82
生産者が主体のピーマン産地の育成	（大船渡）	84
水稻鉄コーティング直播栽培技術の取組	（宮古）	86
宮古地域大夢栽培研究会活動支援	（宮古）	88
周年出荷へ向けた冬期品目導入の取組	（宮古）	90
岩泉町における酪農振興支援	（宮古）	92
担い手に繋ぐほうれんそう産地の形成	（久慈）	94
畑作物種子の計画的生産	（二戸）	96
JA新しいわて北部地域におけるきゅうりの生産拡大	（二戸）	98
りんどうの安定生産と産地規模の維持	（二戸）	100
3	「6次産業化等をめざした高付加価値化の推進」に対する支援	102
大槌町における酒米生産支援	（大船渡）	102
郷土料理レシピ収録とレシピ集発表会を支援	（久慈）	104
4	「環境と共生する産地づくりの推進」に対する支援	106
土壌診断に基づいた適正施肥の推進	（中央圏域）	106
鶏ふん由来資材による肥料費削減	（大船渡）	108
5	「農村・地域の振興」に対する支援	110
果樹における獣害被害防止の取組	（盛岡）	110
6	「東日本大震災津波からの復旧・復興」に対する支援	112
陸前高田市のりんごの復興	（大船渡）	112
津波被災農地でのそば栽培とそば活用による情報発信	（宮古）	114
III	参考資料	116
1	平成27年度普及指導活動時間集計	117
2	平成27年度普及関係職員名簿	118
3	普及関係公所の所在地及び連絡先	129

I 気象経過と農作物の生育概況

1 平成27年1月から12月までの気象概況

2 農作物の生育概況

1 平成 27 年 1 月から 12 月までの気象概況

(1) 年間の気象概況

【天候の特徴】

- ・ 1 月の少雪
- ・ 2 月～3 月の高温
- ・ 4 月～7 月の高温、少雨
- ・ 8 月下旬の低温
- ・ 10 月～12 月の高温

1 月は、平均気温が高めで推移し、降雪量が少なかった。

2 月から 3 月にかけては、平均気温が高めで推移した。

4 月から 7 月にかけては、全般的に降水量は少なく、平均気温は高めで推移した。

8 月は、上旬は高温で経過したが、下旬は曇りや雨の日が続き、気温はかなり低かった。

9 月は、前半は低気圧や前線の影響で雨の日が多かった。後半は、高気圧に覆われて晴れる日が多かった。

10 月から 12 月にかけては、高気圧に覆われて晴れる日が多く、平均気温は高めで推移した。

(2) 旬別の気象概況 ※岩手県の天候のまとめ（盛岡地方気象台作成）より抜粋

〈1 月〉：平均気温が高い、降雪量が少ない

上旬：冬型の気圧配置となる日が多かった。内陸の山沿いでは曇りの日が多く、沿岸部では晴れの日が多かった。6 日から 7 日にかけて冬型の気圧配置が強まり、岩泉・釜石・久慈で 1 月の日最大風速の極値を更新した。

中旬：低気圧と高気圧が交互に日本付近を通過し、低気圧の通過後は冬型の気圧配置となり内陸では曇りや雪の日が多く沿岸部では晴れの日が多かった。

下旬：低気圧と高気圧が交互に日本付近を通過した。低気圧は三陸沖を通過したため、沿岸部では曇りや雨の日が多かった。

〈2 月〉：平均気温が高い、日照時間が少ない

上旬：冬型の気圧配置となる日が多く、曇りや雪の日が多かった。8 日から 9 日にかけて低気圧や前線の影響で大荒れの天気となった。

中旬：13 日から 14 日にかけて低気圧が通過し大荒れの天気となり、久慈・岩泉・小本で 2 月の日最大風速の極値を更新した。低気圧の通過後は 16 日まで冬型の気圧配置が続いた。その後、18 日から 19 日にかけて日本の東を低気圧が発達しながら通過したため、沿岸部では曇や雨となった。

下旬：高気圧と低気圧が交互に通過し天気は周期的に変わった。22 日から 23 日にかけてと 26 日から 27 日にかけては、日本海と関東の東を低気圧が通過した影響で大荒れの天気となり、遠野・江刺で 2 月の日最大風速の極値を更新した。低気圧の通過後は、一時的に冬型の気圧配置となった。

〈3月〉：平均気温が高い、降水量が多い、日照時間が多い

上旬：低気圧と高気圧が交互に通過し、低気圧の通過後は冬型の気圧配置となった。低気圧は三陸沖を通過することが多かったため、沿岸部でも雨や曇の日が多かった。

中旬：11日は強い冬型の気圧配置となり大荒れの天気となった。その後は、移動性高気圧に覆われる日が多く晴れて気温の高い日が続いた。19日は三陸沖を低気圧が通過した影響で沿岸部では雨となった。

下旬：高気圧に覆われる日が多く、低気圧や前線の影響を受ける日が無かったため、晴れて気温の高い日が続いた。

〈4月〉：平均気温が高い、日照時間が多い

上旬：前半は低気圧と高気圧が交互に通過し天気は周期的に変わった。また、南から暖かい空気が流れ込んだため気温が高く経過した。後半は寒冷な移動性高気圧に覆われる日が多く気温が低く経過した。

中旬：低気圧や気圧の谷の影響をうける日が多く雨や曇の日が多かった。15日と20日は前線を伴った低気圧の影響で大雨となったところがあった。

下旬：高気圧に覆われる日が多く、晴れて気温が高く経過した。

〈5月〉：平均気温が高い、日照時間が多い、少雨

上旬：高気圧に覆われて晴れる日が多く気温が高く経過した。

中旬：低気圧や高気圧が交互に通過し天気は周期的に変わった。

下旬：高気圧に覆われて晴れの日が多かった。

〈6月〉：16日の局地的大雨、26日から28日にかけての大雨

上旬：高気圧と低気圧が交互に通過し天気は周期的に変わった。

中旬：高気圧に覆われて晴れる日が多かったが、寒気を伴った気圧の谷の影響で大気の状態が不安定となり、局地的に大雨となる日があった。14日は区界で、16日は紫波で、17日は藪川で6月の日最大1時間降水量の極値を更新した。特に、紫波の95.5mmは年の極値を更新する大雨となった。

下旬：前半は高気圧に覆われて晴れる日が多かった。27日から28日にかけて低気圧が通過したため沿岸北部と両磐地域では大雨となり、普代では24時間降水量が観測開始以来最大となる343.5mmを観測した。

〈7月〉：高温、少雨、日照時間が多い

上旬：前半は低気圧や前線の影響で雨や曇の日が多かった。後半は高気圧に覆われて晴れる日が多かった。

中旬：前半は高気圧に覆われて晴れる日が多く、暖かい南風が入り気温が高かった。14日は、県内の8箇所の日最高気温の7月としての高い方からの極値を更新し、山田では通年の極値を更新した。後半は梅雨前線や台風の影響で曇や雨の日が多かった。

下旬：日本の南の高気圧に覆われて晴れる日が多く、南から暖かい空気が入り気温が高かった。22日は、県内の6箇所の日最高気温の7月としての高い方からの極値を更新し、花巻・大迫・江刺では通年の極値を更新した。23日から25日にかけて梅雨前線の影響で大雨となった。28日は南から暖かく湿った空気が流れ込み、大気の状態が不安定となり、久慈で44.5mmの日最大1時間降水量を観測し7月としての極値を更新した。

〈8月〉：上旬の高温、下旬の低温

上旬：高気圧に覆われて晴れる日が多かった。2日は、上空に寒気を伴った気圧の谷が通過した影響で大気の状態が不安定となり、山形では48.5mmの日最大1時間降水量を観測し8月としての極値を更新した。後半は、オホーツク海高気圧の影響で曇の日が多かった。

中旬：低気圧や前線の影響で曇や雨の日が多かった。11日は上空に寒気が流れ込んだため大気の状態が非常に不安定になり、川井では67.5mmの日最大1時間降水量を観測し、年の極値を更新した。18日は三陸沖を通過した低気圧の影響で、沿岸で局地的な大雨となり、大船渡では45.0mmの日最大1時間降水量を観測し、8月としての極値を更新した。

下旬：低気圧や前線の影響で曇や雨の日が多かった。また、オホーツク海高気圧から冷たい空気が流れ込んだため、気温がかなり低くなる日が続いた。

〈9月〉：8日から11日の大雨、17日から19日の大雨

上旬：前線や低気圧の影響で曇や雨の日が多かった。8日から11日にかけて低気圧や台風の影響で大雨となった。

中旬：14日から17日にかけては移動性高気圧に覆われて晴れる日が続いたが、その他の日は前線や低気圧の影響で曇や雨の日が多かった。11日は台風第18号から変わった低気圧の影響で大雨となった。17日から19日にかけては前線をともなった低気圧の影響で沿岸部では大雨となったところがあった。旬平均気温は平年並だった。

下旬：25日から26日にかけて前線や気圧の谷の影響で雨となった、その他の日は高気圧に覆われて晴れる日が多かった。

〈10月〉：日照時間が多い

上旬：高気圧に覆われて晴れる日が多かった。1日から2日にかけては発達した低気圧の影響で大雨となった。8日は、日本の東を台風第23号が北上した影響で海上を中心に暴風となった。

中旬：11日から13日にかけて前線や気圧の谷の影響で曇や雨となったが、その他の日は移動性高気圧に覆われて晴れる日が多かった。

下旬：前半は移動性高気圧に覆われて晴れる日が多かった。24日は前線の通過により雨が降った。後半は低気圧や気圧の谷の影響で曇や雨の日が多かった。

〈11月〉：平均気温が高い、降水量が多い

上旬：前半は高気圧に覆われて晴れる日が多く、後半は低気圧や前線の影響で曇や雨の日が多かった。

中旬：前半は高気圧に覆われて晴れる日が多かったが、後半は低気圧や前線の影響で曇や雨の日が多かった。14日から15日にかけては、低気圧や前線の影響で雨となった。

下旬：低気圧や前線の影響で曇や雨の日が多かった。

〈12月〉：平均気温が高い、日照時間が多い

上旬：3日に前線が通過し曇や雨となり前線の通過後は冬型の気圧配置となったため、4日は雪が降った。後半は、移動性高気圧に覆われて晴れる日が多かった。

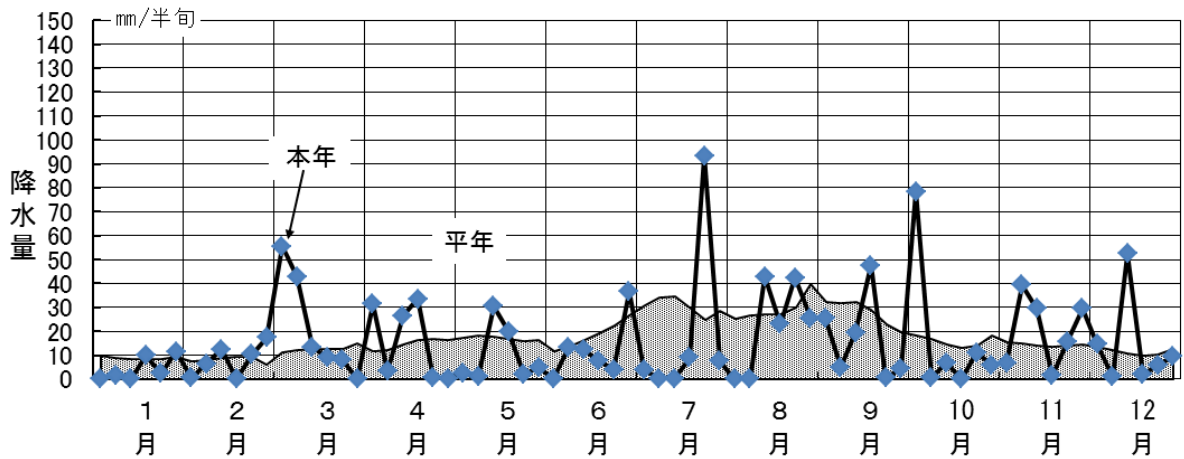
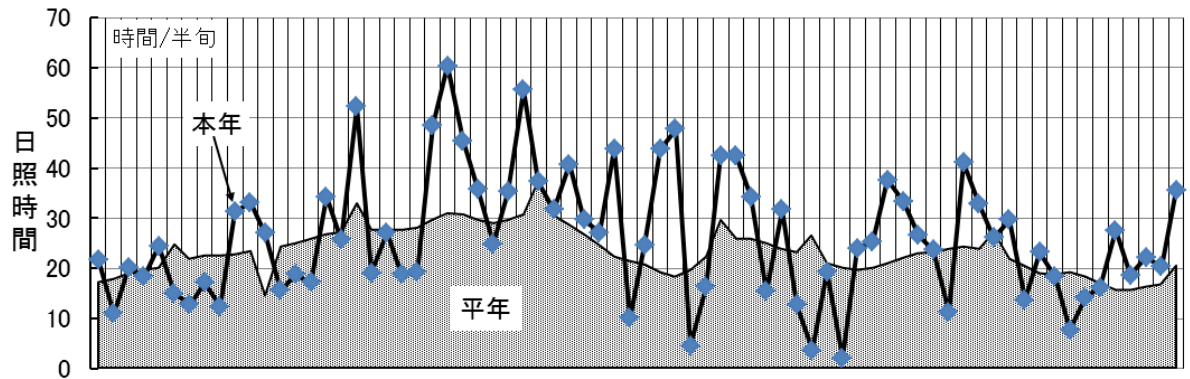
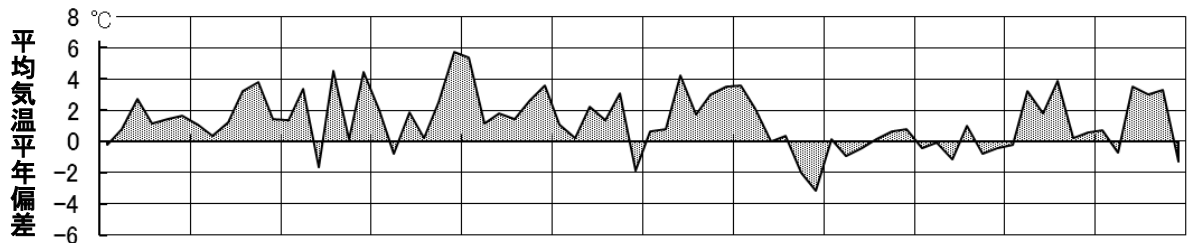
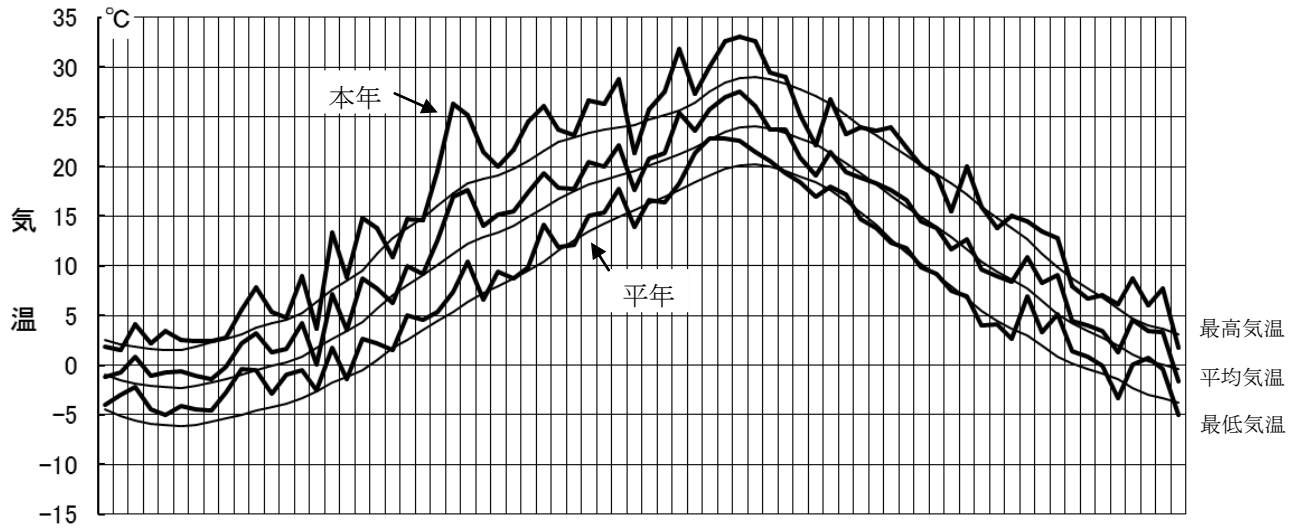
中旬：11日は低気圧の影響で県内全域で大雨となった。その後は低気圧と高気圧が交互に通過し天気は周期的に変わったが、低気圧の影響は少なく晴れの日が多かった。

下旬：前半は低気圧の影響で雨の降る日や、低気圧の通過後は冬型の気圧配置となり雪の降る日があった。期間を通して冬型の気圧配置は長続きせず、移動性高気圧に覆われて晴れる日が多かった。

(3) 主な気象データ

ア 盛岡における気温、降水量、日照時間

平成 27 年の気象経過 [旬別：盛岡地方気象台]



イ 終霜

気象官署	月 日	平 年	昨 年
盛岡	4月22日	5月3日	4月24日

ウ 梅雨入り、梅雨明け（東北北部）

	月 日	平 年 (平年差)	昨 年 (昨年差)
梅雨入り	6月27日頃	6月14日頃 (13日遅い)	6月6日頃 (21日遅い)
梅雨明け	7月29日頃	7月28日頃 (1日遅い)	7月25日頃 (4日遅い)

エ 気象官署及び特別地域気象観測所（盛岡、宮古、大船渡）における記録更新（第5位まで）

(ア) 月平均気温

気象官署	月	記録 (°C)	備 考
大船渡	3	6.0	高い方から2位
盛岡	3	4.4	高い方から2位
宮古	3	5.3	高い方から3位
大船渡	4	11.0	高い方から2位
盛岡	4	10.5	高い方から3位
大船渡	5	16.6	高い方から1位
盛岡	5	16.6	高い方から1位
宮古	5	15.9	高い方から1位
大船渡	11	10.1	高い方から4位

(イ) 月間降水量

気象官署	月	記録 (mm)	備 考
大船渡	3	184.5	多い方から1位
大船渡	5	82.0	少ない方から4位

(ウ) 月間日照時間

気象官署	月	記録 (時間)	備 考
大船渡	1	128.2	少ない方から2位
大船渡	2	116.3	少ない方から5位
大船渡	5	253.7	多い方から2位
盛岡	5	234.3	多い方から5位
宮古	5	249.9	多い方から3位
大船渡	10	186.3	多い方から2位
盛岡	12	140.6	多い方から3位

(エ) 降雪の深さの月合計（降雪量）

気象官署	月	記録 (cm)	備 考
盛岡	3	90	多い方から2位

2 農作物の生育概況

(1) 水稻（作況指数は「105」、うるち米1等米比率は95.7%）

水稻の移植後、良好な気象条件で経過し生育初期～分けつ期の生育は旺盛であった。幼穂形成期・減数分裂期も障害不稔等が懸念されるような気象条件にならなかったことから、出穂盛期は8月1日と平年より3日早かった。

本年は出穂が早まり、登熟初期は高温多照で経過したが、玄米品質の低下が懸念されるような高温条件とはならなかった。

8月第3半旬以降は一転して低温少照で経過したことから、登熟はやや緩慢であった。

登熟期後半は、移動性高気圧に覆われて晴れる日もあったが、前線や低気圧の影響で曇や雨の日が多かったことから、成熟期（水稻生育診断圃）は平年より2日遅い9月18日だった。

本年は、栄養生長期の良好な気象経過により全県で穂数が平年より多く確保され、一穂粒数は平年より少なかった（特に北上川上流）ものの、総粒数は平年並から上回った地域が多かった（北上川上流は平年をやや下回った）。また、登熟歩合及び玄米千粒重は平年をやや上回った。粒厚は総粒数により地域性があり、北上川下流は概ね平年と同様だったが、東部・北部は平年よりやや小粒割合が高くなり、一方、北上川上流は平年より大粒割合が高かった。

なお、一部地域でいもち病発生（穂いもち）が広く見られたが、全県的な減収要因とならなかったことから本県の作況指数は「105」（やや良、10aあたり収量560kg/10a）となった。

うるち米の1等米比率が95.7%（平成28年2月29日現在）と全国第2位（全国第1位は長野県95.9%）であった。また、もち米の1等米比率が87.5%（平成28年2月29日現在）と全国第2位（全国第1位は北海道91.8%）であった。

主な落等理由は着色粒（カメムシ類）、形質（その他）及び充実度であった。

その他、平成26年度から検査対象となった飼料用もみは4,277トン、飼料用玄米は15,665トンであり、全て合格した。

ア 播種期・育苗期（播種盛期は平年並の4月15日、苗質は良好）

播種作業はおおむね平年並に始まり、県全体の盛期（50%終了）は4月15日で平年並。

気温は育苗期間中を通じて平年を大きく上回って経過した。育苗期の病害発生は全般に少なく、苗質は草丈が平年よりやや長かったが、充実度（風乾重/草丈）は平年を上回るなど良好であった。

イ 移植期～活着期（移植盛期は平年より2日早い5月15日、活着は概ね良好）

5月も天候は良好に経過し圃場の準備作業は順調に行われた。県全体の移植盛期は5月15日と平年並、終期は5月22日と適期内に田植え作業が終わった。

移植期は気温が高く、良好な気象条件で経過し、活着は概ね良好であった。しかし、苗の草丈が平年より長く、各地域で風の強い日があるなど、移植直後に強風に遭遇した圃場では植え傷みが広く目立った。

また、月降水量は平年を下回る地域がほとんどで、一部、用水確保に苦慮した地域があったが、移植作業は概ね計画どおり行われた。

ウ 分けつ期（高温経過により生育は良好）

6月以降も引き続き高温多照で経過した。降水量は、全般に平年より少なく経過したが、局地的豪雨により短時間で極めて降水量が多い期間（紫波、6月第4半旬）があるなど、一部で圃場内への土砂流入や畦畔崩壊等の被害も見られた。

東北部が6月27日頃に梅雨入りして以降、日照時間は平年を下回る日が多かったが、気温は平年を上回って経過した。

このため、分けつ発生は旺盛で、各農業改良普及センターが実施した一斉生育調査（6月15日及び6月25日の調査結果）では、各地域で草丈、茎数、葉数とも平年を上回った。

エ 本田生育期の土壌と稲体栄養（地上部乾物重大・窒素吸収量大）

6月25日調査以降、各地域とも必要茎数は確保され、葉色が低下傾向であったこと、乾土効果による土壌中の窒素発現が期待できないと判断されたこと等から、「ひとめぼれ」「あきたこまち」「いわてっこ」は基準量N2kg/10aを上限に、「どんぴしゃり」はN2kg/10aの追肥を基本として、幼穂形成期の追肥指導を行った。

オ 幼穂形成期～出穂期（出穂盛期は3日早い8月1日）

7月以降も引き続き平年に比べて気温が高く経過し、障害不稔等が懸念されるような気象条件とはならなかった。なお、東北部の梅雨明けは7月29日頃（梅雨期間は32日間）であ

った。

幼穂形成期は平年並、減数分裂期は1日早かった（幼穂形成期7月11日、減数分裂期7月24日）。また、出穂盛期は8月1日と平年より3日早かった。

出穂期間は全般に良好な気象経過であったことから出穂・開花は良好であった。

カ 登熟期～成熟期（登熟歩合は平年並）

本年は出穂が早く、登熟初期は高温多照で経過したが、8月第3半旬以降、一転して低温少照で経過したことから登熟はやや緩慢となった。本年は、玄米品質の低下が懸念されるような高温条件とはならなかった。

9月1日に各普及センターで行った一斉調査では、県全体の沈下粒数歩合は85.6%（平年86.8%）と概ね平年並であった。

登熟期後半は、移動性高気圧に覆われて晴れる日もあったが、前線や低気圧の影響で曇や雨の日が多かった。月平均気温は平年並、月降水量は県の南部と沿岸では多く、内陸北部で平年並だった。月間日照時間は多かった。

水稻生育診断圃における成熟期は、平年より2日遅い9月18日であった。

キ 刈取り期（刈取り盛期は平年より1日早い10月3日）

収穫作業は概ね平年並に進み、刈取盛期は平年より1日早い10月3日であった。

ク 収量（作況指数105）

全县で穂数は平年を上回り、一穂粒数は平年より少なかった（特に北上川上流）ものの、総粒数は平年並から上回った地帯が多かった（北上川上流は平年をやや下回った）。

また、登熟歩合及び玄米千粒重は平年をやや上回った。

粒厚分布は、県全体では概ね平年並だった。地域別には、北上川下流は概ね平年と同様だったが、総粒数が平年を上回った東部・北部は平年よりやや小粒方向にシフトした一方、総粒数が平年を下回った北上川上流は平年より大粒方向にシフトした。

ケ 品質（1等米比率95.7%と全国第2位。落等原因トップは斑点米カメムシ）

品質では、うるち米の1等米比率が95.7%（平成28年2月29日現在）と全国第2位（全国第1位は長野県95.9%、本県は東北第1位、第2位は山形県94.6%）であった。

もち米の1等米比率は87.5%（平成28年2月29日現在）と全国第2位（全国第1位は北海道91.8%）であった。

2等以下に格付けされた主な理由は、「着色粒（カメムシ類）」が44.2%（総検査数量に占める割合1.9%）、「形質（その他）」が13.8%（同0.6%）、「充実度」が10.6%（同0.4%）であった。また、品種別の1等米比率は、「ひとめぼれ」が96.1%、「あきたこまち」が96.0%、「どんぴしゃり」が96.9%、「いわてっこ」が92.2%であった。（うるち米、平成28年2月29日現在、東北農政局）

その他、平成26年度から検査対象となった飼料用もみは4,277トン、飼料用玄米は15,665トンであり、全て合格であった。

コ 病害虫の発生（葉いもち・穂いもち 少、紋枯病 多、斑点米カメムシ類 多（斑点米 並））

葉いもちの発生は、6月下旬から7月中旬にかけて降雨が少なく、感染好適条件がほとんど出現しなかったことから、平年より少なかった。しかし、北上、胆江、一関地域の7月下旬調査における発生圃場率は平年を上回っており、7月30日に地域限定の注意報が発表された。

穂いもちの発生は、8月上旬にほとんど降雨がなかったため、少なかった。発生程度は8月中旬以降の雨による軽微な発生であったが、北上、胆江、遠野、一関地域の発生圃場率は平年並から高く、葉いもち、穂いもちともに発生に地域間差が見られた。

紋枯病の発生は、6月から7月の高温経過により、早期感染及び水平進展が進んだこと、7月下旬から8月上旬にかけての高温、7月下旬と8月中旬の降雨により、垂直進展も進んだことにより、多かった。収穫期の発生圃場率は過去10年間で最も高くなり、発生程度も県南部では止葉まで枯れ上がる圃場が散見されるなど、平年より高かった。

斑点米カメムシ類の発生は、8月上旬までの高温傾向により発生時期は早まり、アカヒゲホソミドリカスミカメを中心に発生量も多く、7月30日に注意報が発表された。しかし、8月中下旬の降雨や8月下旬の低温により活動が抑制され、8月下旬の発生圃場率は平年並となり、9月中旬は平年より低くなった。

斑点米の発生は、割れ粒率が平年並であったこと、薬剤散布、畦畔管理が例年並に徹底されたことなどから、平年並となった。

(2) 畑作物

ア 小麦

【27年産小麦（26年播種）】

(ア) 播種～初期生育

台風の接近に伴う降雨等により一部圃場準備が遅れた地域も見られたが、播種は県南部等を中心に9月下旬頃より始まり、全体的には概ね平年並の時期に行われた。越冬前の初期生育は葉色も濃く概ね良好に推移した。晩播した圃場で、12月初めの降雪がそのまま根雪になった所では生育量の不足が見られた。

(イ) 越冬後の生育

根雪始めは早かったものの、雪解けが早かったことから根雪期間の長さは概ね平年並（農研センターの場合、12月2日～2月28日までの89日間で過去10年平均より6日長い）。本年は3月下旬に日照に恵まれ、この時期に主産地を中心に排水のよい圃場では融雪期追肥が実施された。4月上旬から中旬にかけて雨が多く、やや湿害傾向が見られた。

(ウ) 茎立～出穂・開花

4月21日以降5月中旬まで目立った降雨がなく、高温・干ばつ傾向が続いた。越冬後から平年を上回る気温で推移していたが、4月21日以降は日照時間も平年を上回り、気温も2～3℃程度高く経過した。播種期や地域による違いはあるものの、平均すれば約1週間程度出穂・開花が早まった。

(エ) 生育・登熟状況

降雨の少ない状況が続いており、根張りの劣る麦では葉先枯れ、枯上がりなどが一部見られた。麦の生育状況としては、穂数等は概ね平年並、稈長・穂長などは短め、千粒重はやや小さめ、と推定される。成熟は平年より1週間程度早まった。

(オ) 刈取り状況

刈取りは平年より1週間程度早く、6月20日頃より県中部と県南部より始まった。6月27～28日の雨で一時中断したものの、全体に収穫は好天に恵まれ順調に進んだ。7月1日現在の刈取り進捗状況は70～80%と推定され、ここ10年ほどで最も早かった。

(カ) 成熟期調査結果（生育診断圃を中心とした）

- ・出穂 ナンブコムギ・ゆきちからとも5日程度早い。
- ・成熟 ナンブコムギ・ゆきちからとも6日程度早い。
- ・稈長 ナンブコムギ・ゆきちからとも平年並。
- ・穂長 ナンブコムギ・ゆきちからとも平年並。
- ・穂数 ナンブコムギ・ゆきちからとも平年並～やや多。

(キ) 収穫量及び検査結果

湿害の発生は少なかったが干ばつ等により収量は伸び悩み、農林水産省発表による県平均収量は10a当たり平均収量対比100の178kg/10aとなった。

27年産の麦類の検査結果（27年12月末現在）は、検査数量が7,068t（26年産・確定値6,102t）、一等比率が95.5%（26年産・確定値88.1%）となった。

(ク) 病害の発生（病虫害防除所調査結果より）

- ・雪腐病：発生圃場率、発生程度ともにほぼ平年並であった。
- ・縮萎縮病、萎縮病：発生程度の高い圃場が散見されたが、発生圃場率は平年よりやや低かった。
- ・赤かび病：6月上～中旬の巡回調査では、発生穂率1%以上の圃場は認められなかった。

【28年産麦（27年播種）】

(ア) 播種～越冬前

播種作業は概ね平年並の時期に実施。県南の一部で播種が遅れた所があるが出芽および出芽後の生育も概ね平年並。越冬前の生育は概ね順調に推移したが、晩播や水稲跡などでは湿害等が散見される。

27年から28年にかけて暖冬のため根雪期間は平年を大幅に下回った。このため、越冬後の生育は進んでいる。雪腐病の発生は少ないが一部で鳥害や凍上害が散見される。

イ 大豆

(ア) 播種～本葉展開期

播種は平年より早めにスタートし、播種作業は順調に進んだ。土壤の乾燥により出芽揃いがやや劣った地域が一部見られたが、全体に初期生育は概ね良好であった。6月の記録的高温、少雨により生育は順調で湿害の発生は少なく、中耕培土も順調に実施された。

(イ) 開花期

7月に入ってから7月22日まで県内全般に降雨が極めて少ない状況が続いたため、全体に草丈が短く、また、土壤乾燥による葉の立ちや裏返り、葉巻などが見られた。このため、7月上旬から主産地を中心に畦間灌水が一部で実施された。7月23日・25日のまとまった雨により土壤の乾燥状態はかなり緩和された。

(ウ) 莢伸長期～成熟期

8月上旬は再び高温・少雨状況となり、干ばつ傾向が見られた。しかし、8月中旬以降は雨の日が多くなり、土壤は湿潤状態に転じた。

9月は11日、18日から19日にかけて大雨に見舞われ、9月の降水量は平年を上回り、全体に土壤水分が高い状態が続いた。登熟期の日照時間は平年を上回り、登熟は概ね順調に進んだ。主茎長は平年より全体に長く、倒伏がやや目立った。

10月中旬以降成熟期を迎え、刈取りが県中～県南部から始まった。10月中旬から下旬にかけて晴天が続き、子実水分が順調に低下したことなどから、平年より5日程度早く刈取りが進んだ。汚損粒および被害粒等の発生は平年に比べ少なかった。

(エ) 病害虫の発生

- ・紫斑病：子実調査では発生圃場率は平年より低かった。
- ・べと病（べと病類似症状を含む）：子実調査によると発生圃場率は平年よりやや高かった。品種別では、シュウリュウで発生程度の高い圃場が見られた。
- ・モザイク病（褐斑粒）：子実調査では平年並に発生は少なかった。
- ・マメシンクイガ：子実調査では発生圃場率は平年よりやや少なかった。
- ・カメムシ類：子実調査では発生圃場率は平年並だった。

(オ) 収量及び品質

平成28年2月23日現在の10aあたり収量は、県全体で140kg/10a、平均収量対比は118となった（農林水産省発表）。

平成28年1月31日現在の27年産岩手県産普通大豆の一等比率は57.7%であった。

(3) 野菜

ア きゅうり

露地普通作型では定植後7月まで少雨乾燥傾向が続いたことにより、一部初期生育が緩慢で生育抑制気味の圃場も見受けられたが、灌水の実施や降雨により概ね生育は回復した。しかし、圃場が乾燥気味に経過した影響からか、6月下旬にはフケ果の発生が一部地域で発生したほか、果実肥大が緩慢で出荷数量が伸び悩んだ。7月下旬にややまとまった降雨があり、生育が回復したものの、例年のような増量となはず、9月上旬の低温以降は果実肥大も緩慢となり9月末頃に収穫終了となる圃場が多かった。かん水施設を整備し、初期の乾燥時に適切な水管理を実施した圃場においては、今年も10月下旬まで収穫が継続された。

病害虫では早期からアブラムシやアザミウマの発生が多く、ウイルス病の発生も多い年だった。生育前半の病害発生が非常に少なかったが、7月下旬のまとまった降雨により各種病害が多発し、特にべと病と炭疽病の発生が多く見られた。キュウリホモブシス根腐病については、発生圃場面積が昨年よりも減少し、対策技術の確実な実践と、早期被害リスクの把握による総合防除対策が浸透しつつある。

収量は前年比104.2%、全体出荷量も103%といずれも昨年を若干上回った。

イ トマト

雨よけ作型の定植時期である4月以降、極端な低温もなく推移し、生育は順調に推移した。6～7月も好天となり、7月末までの出荷量は例年より2割増しの前倒し出荷となった。しかし、高温乾燥基調の天候や着果負担増加の影響から、7月以降は草勢が低下する圃場が多く見受けられたほか、萎れや落花、尻腐れ果や軟化玉の発生も見られた。8月以

降は小玉傾向となり、9月上旬には極端な低温の影響から果実肥大や着色が緩慢になり、裂果などの障害果が増加した。

病害虫では、全般に病害の発生は少なかったが、アザミウマやアブラムシの発生が早くから確認され、6月以降はアザミウマの多発による白ぶくれ果の発生が見られ、9月頃まで多発傾向が続いた。また、サビダニの被害も多く地域で確認された。土壌病害では、高温期を中心に青枯病、かいよう病の発生が見られた。

収量は前年比98.8%、全体出荷量98.6%とほぼ前年並であった。

ウ ピーマン

4月中旬以降の高温、少雨の影響により、施設作型では生育が促進され、5月定植の露地作型では土壌水分が不足し活着が遅れるなどの影響を受けた。

出荷開始は早まったが、乾燥による尻腐れ果が6月の出荷初期から多発したほか、露地作型では圃場の乾燥による生育の停滞も見られた。

7月以降は、施設作型では着果負担の増加により草勢の低下する圃場が目立ち、露地作型ではかん水設備がなく生育が停滞する圃場がみられた。8月には降雨により露地作型で生育が回復したものの、9月に入ると赤果やひび割れ果の発生が増加した。

病害虫は、6月以降アブラムシとアザミウマの発生が増加し、タバコガは7月以降発生が確認され、8月には一部発生が目立つところも見られた。

8月以降、斑点病・青枯病の発生圃場では増加傾向となり、9月に入ると草勢の低下とともに斑点病の多発圃場が見られた。

収量は前年比99%、全体出荷量も前年比99%と昨年並となった。

エ ほうれんそう

昨年より融雪が早く、圃場準備や播種作業が比較的順調に進み、4～6月の気温も高めに経過したことから生育は前進傾向で推移した。5月以降の高温・乾燥により生育停滞や抽台が発生し、地域毎に生育中かん水や遮光等の対策がなされた。6月下旬の梅雨入り以降、生育は回復傾向となったが、7～8月の高温により生育停滞、しおれ、枯死等が発生し、播種も停滞したことから夏期出荷量が減少した。その後は盆明け以降の気温低下に伴い、生育は回復したが、日照不足や低温により軟弱株が増加した。また、10月上旬の強風によりハウスビニール等に被害が見られた地域があった。

病害虫は萎凋病が6月中旬以降発生し、ホウレンソウケナガコナダニは4～6月にかけて、アブラムシは5～7月に平年並に発生した。アザミウマ類は5～8月に発生し、一部地域で多発した。

生食用露地ほうれんそうの春どりは、生育初期の乾燥による生育不良や虫害（アブラムシ、カメノコハムシ）の発生が見られ、十分な収量を確保できない地域もあった。秋どりは概ね順調な生育となったが、9～10月の降雨や強風の影響から収量が低下した地域が見られた。

オ ねぎ

定植は概ね順調に行われたが、4～5月の乾燥により全体的に生育が停滞ぎみとなり、一部で活着不良や葉先枯れが見られた。6月下旬の降雨により全体的に生育は回復したが、一部地域では乾燥による影響が続き、生育遅延が見られた。7月以降は概ね順調な生育となったが、べと病、さび病、ネギアザミウマ、ネギコガ等の被害が見られ、花北地域では萎凋病の発生が確認された。8月は高温乾燥による生育遅延が見られていたが、8月下旬の降雨により急激な太りによる外皮の裂けが発生した。また、防除が遅れた地域では、軟腐病、黒斑病、さび病の発生が確認された。収穫は概ね順調に行われたものの、天候不順により生育が緩慢となり出荷量は減少傾向となった。

カ キャベツ

降雨等の影響で圃場準備が遅れ、県北部では4月下旬から定植が開始された。生育は5～7月にかけて少雨の影響が大きく、生育遅れや不揃い、小玉傾向となった。8月中旬以降は降雨があり、生育は順調に進んだものの、9月以降は気温の低下に伴い生育が緩慢となった。春系品種は11月中旬で収穫が終了となった。

害虫は7～8月にコナガ、タマナギンウワバ、アブラムシが大発生し、大きな被害を受けた圃場があった。また、ジアミド系殺虫剤抵抗性コナガが発生し、被害が見られた。病害は7～8月にかけて株腐病、軟腐病が多く発生した。

キ レタス

県中部の春レタスの定植は平年並の3月下旬頃から開始され、概ね順調な生育となった。県北部の定植は平年並の4月中旬から始まった。5～6月は乾燥により生育停滞が見られたものの、かん水を行ったことにより生育が回復し、本格的な出荷は平年並の6月上旬となった。7～8月上旬は高温・少雨の影響で小玉傾向であったが、腐敗性の病害は少なく、出荷は順調に行われた。8月中旬以降は適度な降雨により生育が回復した。病害では斑点病、べと病、腐敗病が発生した。9月は低温により生育および結球が停滞し、10月前半で収穫終了となった。

ク だいこん

高冷地での播種作業は平年並の4月下旬から開始された。5月は乾燥のため降雨を待っての播種となり作業は遅れたが、出芽には影響せず、生育は概ね順調で6月下旬頃から収穫が開始した。7月は干ばつの影響で生育にバラツキの目立つ圃場があった。

8月は高温の影響で出芽不良や生育不揃いがあり、出荷は減少傾向となった。8月末が最終播種となり、順調に作業が行われた。8～9月はキスジノミハムシやネキリムシ類が多発し、被害が増加した。10月は生育が緩慢になったが、害虫被害は減少、概ね順調な出荷となった。

(4) 花き

ア りんどう

(ア) 生育期

萌芽・展葉期は平年よりやや早い地域が多かった。7月までは降雨量が全般的に少ない傾向にあったが、気温は平年より高めに推移したため、生育は進んだところが多かった。草丈は平年並からやや進んだ生育となり、また、側芽発生期も早かった。

(イ) 開花期

気温が高めに推移したため全般的に開花が前進した。地域差はあるが、早生種は概ね8月上旬には開花終期となった。一部の品種では高温による花卉の着色不良や開花遅延などの障害の発生がみられた。

一方で晩生種も早生種と同様に平年より開花が早く、9月上～中旬に開花盛期となった。また、極晩生種についても平年より早い開花となった。

(ウ) 病害虫

主要病害である葉枯病、褐斑病、花腐菌核病は全般的に少ない発生となった。一方、7月以降、県内各地で黒斑病の発生がみられ、8月に急増する地域が多かった。

害虫ではハダニ類の発生が早く、6月以降発生が増え始め、8月まで多い傾向が続いた。リンドウホソハマキは、平年並の発生となり、発生量は前半は平年より少ない傾向にあったが、秋期の発生率および程度は平年並であった。

イ 小ぎく

(ア) 育苗・定植期

8月咲品種は、平年並の4月下旬から5月上旬に定植された。定植後の生育は、圃場の乾燥の影響でやや緩慢であった。

一方、9月咲品種は、平年並の5月下旬から6月上旬に定植となったが、一部で乾燥の影響により初期生育の確保ができなかったところがあった。

(イ) 生育期・開花期

8月咲品種は初期生育の遅れや生育期間中に降雨が少ない地域が多く、草丈はやや短い生育となった。開花期は7月までは早い傾向にあったが、8月以降は開花抑制となった。

9月咲品種は概ね順調な生育であったが、8月中旬～9月上旬にかけて低温のため生育が遅れ、9月中旬以降の出荷となるとところが多かった。

(ウ) 病害虫

主要病害では、白さび病が親株や育苗時からみられ、定植後も発生が続いた地域が多かったが、平年より少ない傾向にあった。

害虫ではアブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類の発生が多くみられた。オオタバコガは7月以降、県内各地で発生が確認され、発生は10月まで続いた。また、一部でキクヒメタマバエの被害が発生した。

(5) 果樹

ア リンゴ

(ア) 花芽の状況

平成 27 年産りんごの花芽の状況は、花芽率を県平均で見ると「つがる」「ジョナゴールド」「ふじ」とも平年より高めとなった。一方、それぞれの品種で平年以下の地点があり、地域的なバラツキもみられた。また、弱小花芽率は、平年より低いが、県南部の一部地域で平年より高い地域も認められた。

近年、生育期の高温が顕著であり、平成 26 年も 7 月まで気温の高い状態が続き、4～6 月の期間は干ばつ傾向にあり、花芽率低下が懸念されたが、花芽形成期である 7 月の日照時間が多めで推移したことにより、花芽率は平年より高くなったと推察される。また、一部地域で弱小花芽率が高くなったのは、春先から土壤の乾燥状態が続き、7 月は一転、多雨になったことから水分ストレスと思われる樹の衰弱が各地でみられ、そのことで、花芽の充実が劣ったと考えられる。

(イ) 発芽～展葉期

1 月中旬以降、気温は高く推移したため、発芽は平年より 10 日前後早くなった。3 月下旬の気温は特に高くなったため、展葉も平年並より 10 日前後早く推移した。

(ウ) 開花期および結実の状況

4 月下旬から 5 月上旬も高い気温となったため、開花は「ふじ」で平年より 10 日前後早くなった。「つがる」や「ジョナゴールド」も同様の傾向となった。

開花中、好天に恵まれたため、概ね結実は良好であったが、中心果を始め結実率が劣る品種、地域が見られた。結実が低下した要因として、4 月 8～10、18、19、22、26 日の低温（降霜等）、花芽不良が考えられた。また、収量への影響は少なかったものの、果軸の変形やサビ果が多く発生した地域がみられた。

(エ) 果実肥大

開花が早く、結実後の気温が高かったため、6 月 1 日現在の果実肥大は平年比の約 130～200%となった。その後、7 月下旬のまとまった降雨があるまで少雨の状態が続いたため、果実肥大量が鈍化したが、盆以降から雨の日が多くなったため、収穫時期の肥大状況は平年並からやや大きめとなった。また、土壤水分の急激な変化により樹が衰弱した園地が昨年に引き続き散見された。

(オ) 収穫期および果実品質

早生種は平年に比べ、糖度は高め、硬度は低くなった。デンプン指数については 8 月下旬には一気に成熟の進む地域が多く、開花が早まった分、収穫期も早まった。8 月中旬まで高温だったため、成熟に対して着色が遅れる傾向があったものの、8 月下旬には夜温が下がったことから、着色が一気に進む傾向が見られた。8 月中旬以降の降雨による「きおう」へのつる割れが懸念されたが、少なめの発生に止まった。

「ジョナゴールド」については、早生種同様、糖度は平年より高く、硬度は低めとなり、デンプン指数は早く抜ける傾向となった。早生種同様、成熟が早まり、内陸では、例年より 10 日ほど早く収穫期となった。全般的に着色は良好であったものの、成熟の早まりに比べ着色作業が遅れた園地がみられた。

「ふじ」の糖度、蜜入り指数は平年よりやや高め、硬度は平年よりやや低めとなり、デンプン指数は平年並となった。収穫時に硬度が低かったため、越年販売時にはさらに硬度が低下した果実が多かった。「シナノゴールド」では、昨年ほどではないが、収穫の遅れによる裂果が散見された。早生・中生種ほどではないが、晩生種も成熟が早まったことで裂果を助長したものと思われる。

降雹については、6 月 6 日に江刺地域、6 月 14 日に盛岡東部・宮古西部、6 月 16 日に紫波西部などで発生し、果実の損傷が発生した。

収穫期の強風害では、10 月 1～2 日の爆弾低気圧、10 月 8～9 日接近の台風 23 号などにより落果や倒木の被害が認められた。

(カ) 病害虫

乾燥ぎみの天候が続いたため、県下全般にハダニ類の発生が見られた。その他、県南地区で斑点落葉病、県北地区で炭疽病の発生がみられたものの、全般的に病害虫の発生は少なかった。

全県的な発生ではないものの、近年、モモチョッキリゾウムシ、リンゴワタムシ、

カイガラムシ類の被害報告が増加する傾向にある。

(キ) 作柄評価

生産量は、全農岩手県本部の取扱実績（平成 28 年 3 月上旬時点）から、数量で前年対比 112%となった。これは、開花の早まったことで初期の果実肥大が良好となり、結実も良好となったためと考えられる。

販売単価については、前年比 108%となった。全国的に豊作基調だったものの、10 月の強風被害が青森県で大きかったことに加え、青森県産りんごの輸出量が増大していることから国内市場が堅調で推移したためと思われる。

イ ぶどう

(ア) 発芽期～展葉期

4 月の気温が高めで推移したため、発芽及び展葉は平年より 10 日程度早まった。

(イ) 開花期～結実期

4 月下旬以降は気温も高めに推移したため、定点観測地点の満開期は平年より 16 日早い 6 月 2 日に観測され、観測開始（昭和 49 年）以来、最早の生育となった。一方、高めの気温により、新梢伸長が旺盛になり、開花期まで干ばつが続いたこと等により若干の花振るいが見られ、結実率は平年を下回った。

(ウ) 新梢伸長期

発芽から開花まで生育が早まったことにより、新梢長は平年比の 200%超でスタートし、6 月いっぱいまで平年を上回る新梢長となった。しかし、4～7 月の乾燥等により、樹勢が弱まり、最終的な新梢長は平年の 85%となった。

発芽から開花まで気温が高めで推移したことから、房長は平年より大きめとなり、果粒肥大は、生育期間を通してほぼ平年並となった。

(エ) 収穫期

「キャンベルアーリー」「紅伊豆」「サニールージュ」等品種全般に着色はやや早く、収穫時期の着色も良好であったが、高温等により着色が遅れる園地もみられた。

8 月中下旬は日照不足となったが、生育期間を通して気温が高めで推移したため、糖度は平年より高めとなった。

8 月の降雨により、「キャンベルアーリー」を中心に裂果が見られた。

(オ) 落葉期

9 月以降は気温は平年並となったため、落葉は平年並だった。

新梢の登熟程度は、概ね平年並だった。

(カ) 病害虫

6 月までは降水量が少なかったため、全般に病害の発生は少なかった。一方、醸造用品種を中心に 5 月下旬頃からうどんこ病の発生が見られた。害虫の発生は全般的に少なかったが、春先のツマグロアオカスミカメによる葉の被害、夏季乾燥によるサビダニ類、ハダニ類の発生があった。

(キ) 作柄評価

生産量は、系統取扱の出荷販売実績から、前年比 99%の数量となった。これは、開花までの生育が一気に進んだことによる花振るいと収穫期直前の降雨による裂果が原因と考えられた。

販売単価については前年比 106%であり、概ね好調な単価が維持された。

(6) 飼料作物

ア 牧草

(ア) 1 番草

5 月は降水量が少なく、収量はやや少～平年並。収穫時は晴天が続いたため作業は順調に進んだ。

(イ) 2 番草

7 月上中旬は降水量が少なかったため、再生が鈍く、草丈も短く、収量はやや不良～平年並であった。収穫作業は収量確保のために草丈の伸長を待って収穫を遅らせる農家もあった。

(ウ) 3番草

収量は平年並～良好であった。9月中旬以降、晴天が続かず収穫作業は遅れ気味となった。

イ とうもろこし

(ア) 播種～生育・出穂期

播種～除草剤散布までの作業は順調に終了した。しかし、県北部では降水量が少なく、粘土質の圃場で生育の遅れが見られた。

生育遅早は前半高温のため、やや早く生育が順調な地域が多かったが、8月下旬からの気温低下により子実の登熟速度は鈍化した。

(イ) 収穫期

黄熟期到達は一関地域を除くと8月下旬以降の降水と低温により、やや遅れ～平年並となった。一関地域は平年より半月以上早まった。

収量は平年並～やや良となった。

(ウ) 局地的に生じた障害等

一部地域では9月下旬、10月上旬の強風により、圃場で倒伏、折損の発生があった。

Ⅱ 普及指導活動の成果

- 1 「意欲と能力をもった経営体の育成」に対する支援
- 2 「消費地から信頼される産地の形成」に対する支援
- 3 「6次産業化等をめざした高付加価値化の推進」に対する支援
- 4 「環境と共生する産地づくりの推進」に対する支援
- 5 「農村・地域の振興」に対する支援
- 6 「東日本大震災津波からの復旧・復興」に対する支援

新規就農者への事業計画の作成・実践支援

～いわて青年農業者企業家塾の開催～

【中央農業改良普及センター県域普及グループ】

■ 課題名

企業的経営体育成に向けた支援手法の確立と改善

■ ねらい

岩手県では、新規就農者の離農の原因として経営不振が多数を占めており、就農5年後の目標販売額について、認定就農者のうち6割が未達の状況となっている。

新規就農者の目標販売額の達成に向けて、県及び地方段階で栽培技術や経営管理能力の習得のための各種支援を実施しており、その一環として、中央農業改良普及センターでは、青年就農給付金の受給者等を対象とし、経営に関する知識等の習得や企画実践力の向上を目的とした「いわて青年農業者企業家塾」を開催した。

■ 活動対象

青年就農給付金の受給者等、概ね45歳までの青年農業者 15名

受講者の支援を担当する農業普及員 10名

■ 活動経過

(1) 関係機関・団体との連携

岩手県立大学総合政策学部の新田義修准教授を講師に迎え、専門性の高い講座を開催することができた。

(2) 講座の内容

右表のとおり、全6回に分けて開催した。

経営構想や経営戦略等、講座の柱となる部分を新田准教授が担当し、数値計画の部分を中央農業改良普及センター県域普及グループが担当した。

また、先進的な取り組みを行う農業者や過去に開催した講座の受講生を講師に迎え、経営事例を学ぶ機会とした。

(3) 受講生の理解を促した工夫

単なる収支計画ではなく、経営理念の整理、SWOT分析の結果を踏まえた今後の経営構想などを含めた中長期的な経営計画の作成を誘導した。

各回の講義テーマと連動したワークショップを取り入れ、受講者が主体的に考察するよう工夫した。

計画の作成～実践の経過をイメージできるよう過去の受講生（新規就農者・青年農業者）による経営事例紹介を行った。

受講生とともに支援担当普及員も講座を受講し、支援能力の向上を図るとともに、現地における講座期間中及び終了後のフォローアップを実施した。

表 6次産業化プランニング講座内容

回・実施日・会場・内容など
第1回・10月30日・県立大アイーナキャンパス 【開講式】 【先進経営事例に学ぶ】 講義：これからの農業経営者に求められる能力とは 事例研修：顧客志向を高め、高付加価値な野菜生産を目指す都市型農業 演習・討議 講師：新田義修氏（岩手県立大学 准教授） 畑田敏克氏（静岡県）
第2回・11月4日・県立大アイーナキャンパス 【経営構想を考える】 講義：事業計画書を作成する意義と作成のポイント 事例研修：秋津野ガルデン及び秋津野直売所きてらによる地域活性化の取り組み 演習・討議 講師：新田義修氏、原拓生氏（和歌山県）
第3回・11月6日・岩手県農業研究センター 【経営戦略を考えるⅠ】 講義：市場ニーズをとらえ顧客を増やす経営戦略を考える 事例研修：農産物のブランディング 演習・討議 講師：新田義修氏、加藤百合子氏（静岡県）
第4回・11月11日・岩手県農業研究センター 【経営戦略を考えるⅡ】 講義：経営の強みを活かし、弱みをどう克服するか 事例研修：受講生0Bの経営紹介 演習・討議 講師：新田義修氏、百済和至氏
第5回・11月18日・岩手県農業研究センター 【経営に磨きをかける】 講義：利益計画・販売計画を考える 事例研修：受講生0Bの経営紹介 演習・討議 講師：新田義修氏、及川愛氏 佐藤嘉彦（中央農業改良普及センター）
第6回・12月7日・県立大アイーナキャンパス 【事業計画の発表及び受講生相互の質疑応答】 発表：私の描く農業経営（受講生によるプレゼン） 講評：新田義修氏 【閉講式】

■ 活動成果

(1) 活動の成果

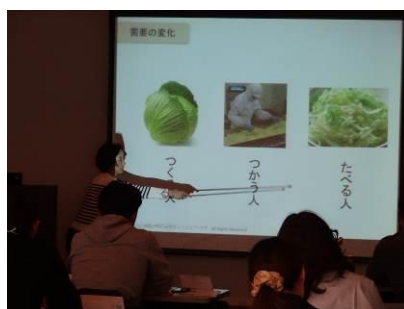
農業経営の実践に必要な知識や、経営課題を解決するためのヒントを学ぶとともに、支援を担当する普及員と協力しながら事業計画の作成を進めたことにより、受講生の経営構想が整理され、今後の営農の方向性を明確にすることができた。

また、受講した普及員は、講義や演習、現地での個別面談等を通じて、新規就農者支援に関する能力の向上が図られた。

(2) 今後の課題

各地域や県立農業大学校が実施する支援施策や新規就農者向け講座との連動について検討が必要である。

【いわて青年農業者企業家塾の様子】



-
- ・今後の経営を考える上で非常に勉強になりました。(受講者)
 - ・講師の先生方や参加者のレベルが高く、大変刺激を受け勉強になりました。(受講者)
 - ・岩手の意識の高い新規就農者の皆さんと受講できて良かった。自分も経営計画を「見える化」し精進していきたい。(受講生)
 - ・自分なりに計画していたプランについて深く考える時間となった。農業に携わる企業の代表の方々の経営スタイルを学ぶことができたのは自分の経営に繋がると思う。(受講生)
 - ・受講者がどのようなことを考えているのか講座を通して見えてきたので、一緒に受講してよかった。講座で作成した事業計画をもとに今後も支援していきたい。(普及員)
- (受講者アンケートから一部抜粋。)
-

■ 協働した機関

農業普及技術課、岩手県立大学

各農業改良普及センター(中央地域、盛岡、奥州、一関、大船渡、二戸)

■ 中央農業改良普及センター県域普及グループ

経営・担い手チーム (チームリーダー：佐藤嘉彦、チーム員：三保野元紀、松浦貞彦)

執筆者：三保野元紀

集落営農組織の多角化による経営発展支援

【中央農業改良普及センター地域普及グループ】

■ 課題名

地域農業の担い手育成（集落営農組織の経営発展支援）

■ ねらい

園芸品目を導入している集落営農組織の課題解決に向けた支援により、組織の経営維持・発展を図ること。

また、園芸品目導入を検討している組織がより具体的な検討の基礎とできるよう、優良事例を収集すること。

■ 活動対象

園芸品目を導入または導入検討している集落営農組織

■ 活動経過

（1）園芸品目導入組織への支援

ア 課題と対策検討、目標所得等確認

（ア）A組織（ピーマン） 定植時期の前進化による7月収量確保

（イ）B組織（ピーマン） 労務管理の見直し、排水対策

イ 生産指導、生産状況確認・把握

ウ 実績検討（課題抽出等）、次年度対策、目標所得等検討

（2）園芸導入事例集作成

（3）園芸品目導入検討組織への活動

ア 園芸導入事例紹介

（ア）事例紹介（集合）

（イ）事例紹介（個別）

 C組織 地域内労働力把握等にかかる構成員へのアンケート調査支援（1月）

 労力活用のための園芸品目導入検討に向けた事例紹介（2月）

■ 活動成果

（1）園芸品目導入組織への支援

ア 集落営農組織園芸部門の目標所得達成組織数4

イ 対策と実績

（ア）A組織（ピーマン）

 低夜温と乾燥により7月の目標収量は達成されなかったが、定植時期の分散が図られ、労務管理面の有望性が把握された。収量確保は次年度も継続して確認する。

（イ）B組織（ピーマン）

 労務管理の見直しにより、収量が確保された。また、排水対策は年度途中の実施となったため、今年度の効果を把握できなかった。次年度に把握する予定。

（2）園芸導入事例集作成

 ピーマン生産4組織の3～4年分のデータから作成

(3) 園芸品目導入検討組織への活動

ア 園芸導入事例紹介

(ア) 事例紹介 (集合)

19組織出席。興味を持つ組織は増加傾向

(イ) 事例紹介 (個別)

C組織 ピーマン導入優良事例を参考に、次年度試作予定

(4) 残された課題

目標収量・所得確保のための技術・労務管理の改善

労力確保

導入優良事例の波及



労務管理の見直しによるピーマン生産
(B組織)



多角化志向組織への園芸品目導入事例紹介
(C組織)



当組織では、H20にピーマンを導入したが、昨年度は「取り負けて」しまい、単価の高い時期思うように出荷できなかった。そこで、今年度は「取り負けないこと」を目標に、雇用の確保と労務管理の見直しを行ったところ、十分な収量が得られた。ピーマン部門は、組織内で利益を残せる部門なので、今後も安定的に収量を確保できるよう、課題解決しながら生産に励みたい。

所属職名：ガンバいさご営農組合 組合長 氏名：菊池初見

■ 協働した機関

J A、市町、農林振興センター

■ 中央農業改良普及センター

担い手チーム (チームリーダー：昆野善孝、チーム員：木村陽子、一沢あゆみ)

遠野普及サブセンター (多田典穂)

執筆者：一沢あゆみ

認定農業者の経営管理能力向上支援

【八幡平農業改良普及センター】

■ 課題名

重点支援対象者及びリーディング経営体の経営力強化

■ ねらい

葛巻町認定農業者協議会と連携し、認定農業者の経営力向上に向けてパソコン簿記記帳ソフトを活用した簿記記帳研修会の開催を長年支援してきた。

しかし、これまでは自力で決算書作成はできるが、貸借対照表の作成まで至っていない受講者が多いのが現状であった。また、受講生は酪農経営体が多く、現在の経営では多くの搾乳牛や大型機械等が利用され、正味財産が分かりづらい他、利益がどの項目で増えているのか分からない、という声が受講生から出されていた。

そこで、貸借対照表を経理管理のために活用することを目的とし、作成に必要な記帳作業、固定資産や育成牛台帳との整合性確保、加えて財務諸表分析の研修を実施し、申告目的だけの記帳からの脱却を図った。加えて、参加者同士が互いに教え合い記帳ができるティーチング体制の確立を目指した。

■ 活動対象

パソコンによる簿記記帳を実施している認定農業者及び重点支援対象者

■ 活動経過

(1) 経営管理講座の開催（平成26年度3回、平成27年度2回）

年度末にまとめて記帳する受講者が多いことから、第1回目として春作業が多忙になる前に第1四半期の記帳実施を目的とした研修会を開催し、貸借対照表、生産原価、会計の原則について講義を実施することで記帳の重要性を再確認した。冬期は、簿記記帳ソフトを活用した時系列分析法や前年の記帳結果から簡易な貸借対照表を作成し、目に見えにくい利益の流れを把握し、自ら経営状況を把握する意識を醸成した。

(2) 受講生同士によるティーチング体制の誘導（平成27年度）

受講生への聞き取りで、「家とは別の記帳作業の場があれば、質疑の場は月1回程度でも構わない。」という声が寄せられた。一方、仕訳に関する深い知識を有する受講生も数名おり、受講生同士で疑問を解決する姿も見られていた。

そこで、農閑期に記帳作業の場を認定農業者協議会が提供し、普及員による個別対応を月1回程度設けることを提案した。了承が得られたことから、平成27年度より試行を開始したところ、定型的な仕訳についてはティーチング体制で解決可能であったほか、次年の記帳に活かすためにノートに記録を取る受講生の増加が見られた。

(3) 貸借対照表の作成・完成支援（平成27年度）

決算に向けチェックすべき項目について研修会を実施し、在庫把握のための棚卸の重要性について意識醸成を図ったところ、春の農作業が始まる前に飼料、肥料、農薬等の在庫管理の実施等により、初めて貸借対照表を作成した受講生もいた。また、大まかな貸借対照表は作成していたものの、育成資産台帳等との整合性が不完全であった受講生は、個別指導の実施により貸借対照表の完成と経営分析への活用法を習得した。

■ 活動成果

(1) 経営管理能力の向上

- ・複式簿記記帳を省力的に行うための方法が理解された 12名
(伝票の検索や辞書機能の活用など)
- ・記帳結果を正しく理解する方法が理解された 10名
(貸借対照表の理解や可処分所得の把握、事業主への支払額の把握と所得額との比較など)
- ・記帳結果を分析する方法が概ね理解された 8名
(前年同月比較や財務諸表分析・損益分岐点分析等の実施方法とその意味)

(2) 受講生同士によるティーチング体制の構築

- ・定型的な簿記記帳の操作については、(自らのメモを見るなどの方法により) 教えられる人が育成された (2名)

(3) 貸借対照表の作成と活用

- ・貸借対照表を完成させ (8名)、経営管理に活用する方法が理解された (5名)。

※以上は受講生への聞き取り調査による



普及員対応による記帳支援



葛巻町経営管理講座



正確な貸借対照表の作成とその活用を目標に、複式簿記記帳に取り組んできました。その結果、複数の記帳ミスを見つけることができた他、概ね正確な貸借対照表を作ることもできました。そして、当牧場の財務状況が明らかになり良かったです。

作成した貸借対照表については、今後の規模拡大が円滑に実現できるよう、アグリフロンティアスクールで作成した経営計画と共に、経理管理のために活用していきたいと考えています。

所属職名：葛巻町酪農家（リーディング経営体候補者）氏名：辰柳 勝之

■ 協働した機関

葛巻町、葛巻町認定農業者協議会、

■ 八幡平農業改良普及センター

担い手経営チーム（チームリーダー：中森忠義、チーム員：葛巻美知子、藤原千穂）

執筆者：中森忠義、葛巻美知子

牛飼い女子グループ活動支援

【八幡平農業改良普及センター岩手町駐在】

■ 課題名

地域の核となる和牛繁殖経営体の育成

■ ねらい

管内の和牛繁殖経営は、生産者の約6割が60歳以上であり、また、飼養頭数10頭未満の小規模経営体が約8割を占めている（H25）。販売頭数・生産農家数は減少傾向にある。

一方、若手生産者の一部では経営規模拡大の動きがみられ、産地の維持・拡大に向け、担い手の育成への支援が求められている。

そこで、若手生産者のグループ化と活動支援により、仲間づくりと飼養管理技術の向上、将来の担い手育成を目標として活動を行った。

■ 活動対象

管内の和牛生産農家を中心とする2つの牛飼い女子グループ

八幡平和牛女子倶楽部（八幡平市）、いわてまち紅娘会（岩手町）

■ 活動経過

（1）グループの設立支援

「いわて発元気な牛飼い女子応援事業」の創設を契機に、牛飼い女性の組織化を提案したところ、八幡平市と岩手町それぞれの和牛生産に携わる女性たちが賛同し、2つの牛飼い女子グループの誕生を支援した。

（2）技術向上への支援

ア 八幡平和牛女子倶楽部

衛生管理や雌雄判別精液の活用についての座学研修、飼養管理技術の共有を目的とした牛舎相互巡回、キャトルセンター事例調査等の開催を支援した。

また、購買者ニーズ把握のため、肥育農家との意見交換会を開催した。

イ いわてまち紅娘会

子牛育成技術向上を目的とし、3名の会員を対象に定期的な体高等の測尺を行う牛舎相互巡回と課題把握から改善案の検討を行った。その他の会員には、簡易体高計を作成・配布し、会での検討を自らの経営に反映するよう支援した。

また、市場上場時の子牛の評価向上を目指し、「子牛の手入れ研修会」を行った。

（3）PR活動・交流活動への支援（八幡平和牛女子倶楽部、いわてまち紅娘会）

揃いのワークウェアを身に付け、共進会や子牛市場等の各種イベントで、産地PRやいわて牛の消費拡大PRを支援した。併せて、普及センターのフェイスブックページで牛飼い女子会の活動を紹介するなど取組の情報発信を行った。

また、意見交換・交流を目的として、八幡平和牛女子倶楽部といわてまち紅娘会の合同交流会の開催や、県牛飼い女子会への参加と活動発表会に向けた支援を行った。

■ 活動成果

（1）グループの設立と会員数の増加

技術向上やグループ交流などを目的とした2つの牛飼い女子グループが誕生した。また、

会員相互の交流が図られ、明るく活発に活動する様子が地域に広がり、会員数の増加につながった。

八幡平和牛女子倶楽部：設立当初5人⇒15人

いわてまち紅娘会：設立当初6人⇒13人

(2) 飼養管理技術の向上

子牛の哺育・育成に関する座学研修や、定期的な子牛の測尺と課題検討により、哺育・育成期の飼養管理の重要性が理解され、それぞれが自農場の課題把握と改善に取り組んでいる。

また、いわてまち紅娘会では、子牛の手入れ研修で習得した技術を実践し、購買者から「よく手をかけ育てられている、扱いやすい子牛」と高い評価を得た。

(3) PR活動・交流活動

揃いのワークウェアによる産地のPR活動、各種媒体を活用した情報発信により、地域での認知度が上昇しており、今後一層の活躍が期待されている。

2つのグループ交流会では、家庭と仕事の両立など女性ならではの悩みや工夫、今後の活動について意見交換し、グループ活動の新たな展開につながった。

(4) 新たなグループの誕生

2つのグループ活動が刺激となり、3月には葛巻町に新たなグループ「プエラリア・ワズ（葛の花）」が誕生し、牛飼い女子グループの動きが管内全域に広がった。

(5) 今後の取り組みと課題

2グループとも、活動開始から1年が経過し、新たな目標として全国和牛能力共進会出品や次世代を担う後継者育成を掲げるなど、取組が意欲的になってきている。

他方、今年度はグループ設立1年目であることから、関係機関と連携してきめ細かな支援を行ったが、今後は、自立した組織運営に向けた支援を行っていく必要がある。



【定期的子牛の測尺を実施】



【2つのグループの交流会を開催】



いわてまち紅娘会の会員は初めて会うメンバーがほとんどでしたが、仲良くなるのに時間はかかりませんでした。

仲間と共に牛づくりに真剣に取り組むことができ、また、お互いの牛について意見交換をすることにより、とても勉強になっていると感じています。

会の活動をとおして様々な方と交流しながら、自分たちだけの女子会いわてまち紅娘会を作り上げていきたいです。

所属職名：岩手町 和牛生産農家 氏名：早坂 八四一

■ 協働した機関

J A 新いわて八幡平営農経済センター、同東部営農経済センター、中央家畜保健衛生所、盛岡広域振興局農政部農業振興室

■ 八幡平農業改良普及センター

畜産振興チーム（照井富也、堀間久己、小松真弓、篠崎創）

執筆者：篠崎 創

果菜産地の維持・発展に向けた取組 ～走り陣立てによる野菜経営体の育成～

【奥州農業改良普及センター】

■ 課題名

野菜産地の核となる経営体の育成

■ ねらい

生産者の高齢化、減少を背景に、減少した胆江地域の果菜生産を増加させるため、野菜産地の核となる大規模経営体の育成、集落営農組織での園芸経営改善、新規就農者の確保・育成に取り組む。

■ 活動対象

マスタープラン実践支援事業（大規模施設園芸団地形成型）導入経営体
園芸導入集落営農組織
JA江刺トマト専門部

■ 活動経過

（1）大規模経営体の目標達成に向けた個別指導

対象とした3経営体と目標及び課題を確認し、課題解決に向けた重点個別指導を行った。栽培技術指導に加え、省力的な誘引方法の検討、スケジュール管理指導、休憩所の設置等、雇用を導入した効率的、省力的な栽培管理方法についても指導。

（2）集落営農組織の労働生産性向上支援

集落法人と被雇用者間できゅうりの販売目標を共有させ、目標達成に向けた意識醸成を行った。また、作業の効率を図るため、アーチへの番号設置、テープによる脇芽かき位置の表示など作業の見える化を提案し、労働生産性向上を支援した。

（3）部会と協働した新規就農者育成体制の整備

新規就農希望者の意向に沿った受入経営体の選定、研修状況の確認と助言、農地・施設の取得、就農計画の作成支援などを実施。就農後は、JA江刺トマト専門部と連携し、就農先の近隣ベテラン生産者を師匠として選任。個別巡回指導のほか、月1回の新規就農者指導会についても部会と協働開催し、新規就農者の栽培技術の向上を図った。

また、JA江刺トマト専門部の取組に倣い、JA岩手ふるさとピーマン専門部においても同様の支援体制が整備されつつある。

（4）雇用労働力の確保

経営維持に必要な雇用労働力の確保に向け、一般市民を対象とした「農業サポート現地見学会」を2回開催。農業現場を実際に見てもらい身近に感じてもらうことで、農業での雇用確保を支援。また、雇用者、被雇用者にアンケート調査を行い、雇用環境の課題把握を行った。

■ 活動成果

（1）取組の成果

ア 大規模経営体においては、目標達成には至らなかったものの前年より販売実績が向上。また、生産低下の課題を明らかにすることができ、技術対策の導入につながった。

イ 園芸導入集落営農法人では、販売額が増加（前年比114%）。また、作業時間も前年比

88%と減少し、園芸導入後初めて園芸部門の黒字を達成した。

ウ 専門部と連携した活動を展開したことで、新規生産者全員が目標を達成。部会平均単収も大きく上回る単収を確保した。また、専門部において新規生産者の育成体制が構築され、成功モデルもできたことから、研修生や新規就農者が確保されてきている。

	H25	H26	H27	H28 予定
研修生	1	6	5	2
新規就農者	0	0	4	5

※野菜での研修生、新規就農者確保状況

(2) 残された課題

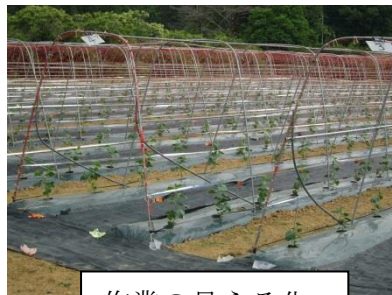
- ア 労働生産性向上に向けた省力化技術の導入
- イ 継続的な新規就農者・研修生の確保
- ウ 雇用環境改善による継続的な雇用確保

(3) 今後の取組み

- ア 雇用導入経営体向け指導会、雇用管理研修会の開催
- イ 大規模経営体育成サポートチームの設置による支援体制の構築
- ウ JA江刺トマト専門部新規就農者育成体制の波及



師匠による指導



作業の見える化



農業サポート現地見学会



師匠制度がうまく機能したことと、新規就農者たちの努力によって一年目からよい結果が出せたのは、専門部にとって大きな自信となりました。最終的には自立した経営体を育てることが専門部の目的であり、二年目以降の支援方法はこれから検討していかなければいけません。

今後継続して新規のトマト栽培者を確保するためには、研修から自立経営までの支援（ハード・ソフト）の仕方をマニュアル化し、全体で共有していくことが必要になると思います。

今後も普及センターと協働で取り組んでいきたいと思っています。

所属職名：JA江刺トマト専門部副専門部長 氏名：高橋光朗

■ 協働した機関

- JA 岩手ふるさとピーマン専門部
- JA 江刺トマト専門部

■ 奥州農業改良普及センター

- 園芸経営指導チーム（チームリーダー：中野俊成、チーム員：高橋司、秦広和、岩渕久代、岩渕瑛子）
- 執筆者：岩渕久代・岩渕瑛子

胆江地方ニューファーマー育成プログラムの推進

【奥州農業改良普及センター】

■ 課題名

地域と協働した新規就農者の確保・育成

■ ねらい

胆江地方では、農業従事者の高齢化と担い手不足により、農業産出額が減少してきており、産地の維持拡大を図るために新たな担い手の確保が喫緊の課題となっている。

このため、胆江地方の主要品目について新規就農希望者を広く募集したうえ、新規就農者受入経営体での実践的な研修を行い、就農に必要な栽培技術や経営管理能力等の習得を支援する。

また、就農後も師匠と連携した栽培技術向上等の支援を行う。

■ 活動対象

研修後、奥州市または金ケ崎町にて、胆江地方の主要品目を導入しようとする就農志向者

■ 活動経過

(1) 新規就農者受入経営体の拡充

- ・ 農業農村指導士を中心に新規就農者受入経営体の登録を推進。

(2) ニューファーマーの募集

- ・ 募集品目に水稲、りんごを追加。
- ・ 普及センターや奥州市、岩手県農業公社のホームページ、J A広報、新聞に募集要領を掲載し、県内外に広く情報発信。
- ・ 主要品目の栽培現場を見学して理解を深めてもらうため、就農相談会・現地見学会を2回開催（7/10：トマト・ピーマン、9/15：きゅうり・トマト）。

(3) 研修生への支援

- ・ 研修生の研修状況確認、就農計画作成支援（3件）

(4) 就農支援

- ・ 研修後、トマトを導入した新規就農者4名に、近隣の先進農家を師匠として認定。
- ・ 中古機械・施設取得に係る助成事業の情報提供および活用を支援し、新規就農者の初期投資の負担軽減を支援。
- ・ 青年就農給付金（経営開始型）受給者を巡回・面談し、営農状況と課題を市町・振興局と共有し、受給者にアドバイスを実施（8月、2月）。

(5) 研修生及び新規就農者の情報共有

- ・ 月1回の担い手支援班会議にて、市町・J A・振興局と就農相談者・研修生・新規就農者の状況について情報共有。



現地見学会でピーマンの説明を受ける参加者(7/10)



関係機関による営農状況調査(8/26)

■ 活動成果

(1) 新規就農者受入経営体の拡充

- ・ 農業農村指導士を中心に9経営体（奥州市7、金ヶ崎町2）が新規登録。計43経営体となり、重点品目で研修受入態勢が充実した。

(2) 研修生の確保

- ・ 募集品目の増加とプログラム拡充
（募集品目：トマト、ピーマン、きゅうり、りんどう、水稻、りんご）
- ・ 就農相談会・現地見学会にはホームページを見た他県2名が参加。
- ・ 就農相談会・現地見学会を開催し、就農希望者の農業生産の現状をよく理解することができた。参加者は7/10の相談会6名・現地見学会10名、9/15の相談会3名・現地見学会5名。
- ・ 育成プログラムに2名（りんご1名、トマト1名）が応募。書類選考、面接選考会、マッチングを経て、江刺区のりんご農家およびトマト農家で研修を開始した。

(3) 研修生への支援

- ・ 平成27年度研修生5名（平成26年度から継続2名、新規3名）が研修実施。品目はトマト3名、ピーマン1名、トマト・ピーマン1名。
- ・ トマトとピーマンの受入経営体が連携した新たな研修を実施した。
- ・ 就農計画作成を支援し、平成27年度中に研修生3名が就農した。

(4) 就農後の支援の充実

- ・ 新規栽培者指導会（全11回）と師匠の指導により、就農後も栽培技術支援を受けやすい体制を整備。就農1年目の3経営体がトマト部会平均単収を上回る12～17 t / 10 a の高収量を達成。
- ・ 5経営体の中古機械・施設取得に係る助成事業の活用を支援した。
- ・ 青年就農給付金（経営開始型）受給者就農計画の修正を支援した。



今年度は青年就農給付金の状況報告に伴う現地調査や、定着状況調査により、新規就農者との直接の係わりが増え、またその内容を支援班会議で情報共有し、より多くの新規就農者の実態把握が出来たと思います。

今後も支援班会議等で様々な情報共有、新規就農者の確保と定着に向けて受け入れ態勢の構築、関係機関が一丸となって取り組んでいきたいと思っています。

所属職名：奥州市農林部農政課農政係 氏名 菊地 美恵

■ 協働した機関

胆江地方農林業振興協議会

■ 奥州農業改良普及センター

担い手・農村活性化チーム

（チームリーダー：伊藤勝浩、チーム員：多田浩美、澁谷まどか、松浦彩子）

園芸経営チーム（岩渕久代、岩渕瑛子）

執筆者：松浦彩子

胆江地域デイリーサポートチームによる次世代経営者の育成支援

【奥州農業改良普及センター】

■ 課題名

畜産の振興（酪農の振興）

■ ねらい

管内酪農家の生産性向上をねらいとし、繁殖検診の定着推進について取組を行った。特にも当管内の繁殖成績は平均分娩間隔が441日と、目標値の400日と比較して大幅に遅延している状況であった。分娩間隔の遅延による損失は、1日1頭あたり1,200円とされ、これを基に試算すると1農場あたりの損失額は約290万円にもなる（管内平均経産牛頭数59頭）。分娩間隔を短縮するためには定期的な繁殖検診が有効とされるが、管内では普及していない状況であった。そこで、繁殖検診の定着を推進するため下記の活動を行った。

■ 活動対象

管内の次世代経営者

■ 活動経過

（1）生産性向上のためのチーム活動

ア 対象農家を選定

関係機関と協議し、飼養頭数30頭以上の規模で後継者がおり、今後地域の畜産を牽引していくことが見込まれる農家を4戸選出した。

イ 関係機関の役割分担と活動内容

関係機関と協議し、下記のとおり決定した。

（ア）NOSAI 胆江 検診及び処置

対象牛を検診し、処置を行う。

（イ）JA 後方支援及び連絡調整

検診補助を行う。

（ウ）普及センター 検診対象牛選定、データの取りまとめ及び技術提案

巡回日までに牛群の台帳を整備し、検診対象牛を選定する。また、対象牛の栄養度等の評価を行い、必要に応じて飼料給与の見直しを提案する。

ウ 支援班による定期巡回を開始

各酪農家を隔週で巡回した（平成25年8月～）。

（2）繁殖検診の制度化に向けた取組経過

ア 繁殖検診による各酪農家の繁殖成績向上を確認

イ NOSAI と酪農家の個人契約に必要な項目を検討

関係機関と協議し、下記項目が必要であることを確認した。

（ア）獣医師が繁殖状況を確認できるよう、農場で繁殖状況が記録されていること。

（イ）検定対象牛の選定が効率的に行えること。

ウ 検診対象牛選定ソフトを作成

■ 活動成果

（1）繁殖成績の向上

ア A農場で-32日間、C農場で-32日間、D農場で-15日間、分娩後初回AI日数が短縮した。（表1）

イ A農場で-70日間、C農場で-49日間、D農場で-15日間、予定分娩間隔が短縮した。（表2）

表1 初回AI日数

	A農場	B農場	C農場	D農場
当初(25年8月)	108日	89日	125日	106日
直近(28年3月)	76日	87日	93日	91日
成果	-32日	-2日	-32日	-15日

※目標値 初妊牛80日 2産目以降60日

表2 予定分娩間隔

	A農場	B農場	C農場	D農場
当初(25年8月)	507日	416日	511日	466日
直近(28年3月)	437日	417日	462日	451日
成果	-70日	1日	-49日	-15日

※目標値400日

(2) 繁殖検診の普及拡大に向けた取組について

検診対象牛選定ソフト及び操作マニュアルを作成し、誰でも容易に検診対象牛を選定することができる環境を整備した。また、NOSAI 胆江及び JA と共有し、各機関で試用を開始した。ソフトの概要については下図のとおり。

〇〇牧場 繁殖情報 入力表

次回検診日 平成28年1月21日

検診区分	牛検番号	個体識別番号	生年月日	最終分娩日	最終AI日	早期妊娠	確定妊娠	検診除外	備考
	114	1114	H22.6.12	H27.5.17	H27.12.15	+			
障害	115	1115	H22.7.8	H27.11.18					
障害	117	1116	H22.10.1	H27.8.25	H27.11.28	-			
	118	1117	H22.8.15	H27.12.12					
早期	112	1118	H23.5.9	H27.12.14					
確定	113	1119	H22.12.28	H27.6.1					
	115	1120	H23.9.4	H27.12.22					
	116	1121	H23.11.5	H27.12.17					
早期	117	1122	H23.9.18	H27.12.14					
	118	1123	H24.1.14	H27.11.2					
障害	119	1124	H23.1.18	H27.11.2					
フレッシュ	124	1125	H24.11.6						

〇〇牧場 繁殖検診票

今日検診日 平成28年1月21日 獣医師名

検診対象牛No	検診区分	牛検番号	個体識別番号	生年月日	最終分娩日	分娩回数	最終AI日	検診回数	早期判定結果	確定判定結果	検診結果	処置	予定
111	早期	1111	1111	H20.5.14	H27.6.5	200回	H27.12.9	40回					
113	早期	1113	1113	H23.5.9	H27.7.14	100回	H27.12.14	30回					
118	早期	1118	1118	H23.5.18	H27.4.4	200回	H27.12.14	30回					
151	早期	1151	1151	H25.11.27		200回	H27.1.17	300回					
114	確定	1114	1114	H22.12.28	H27.2.12	240回	H27.5.1	234回	+				
112	障害	1112	1112	H21.10.17	H27.5.12	130回							
113	障害	1113	1113	H21.8.10	H27.7.28	170回	H27.10.24		-				

■ 協働した機関

J A、NOSAI 胆江、奥州農業改良普及センター

■ 奥州農業改良普及センター

畜産経営指導チーム (チームリーダー：茂呂勇悦、チーム員：長澤亨、新井勇児)

執筆者：新井勇児

りんご若手生産者グループの育成

【一関農業改良普及センター】

■ 課題名

県南の特性を活かした果樹産地の確立

■ ねらい

一関地方には、西磐井地域と東磐井地域のそれぞれに、りんごのわい化栽培に関する研究会があった。しかし、両研究会の交流は少なく、発足から長年経過し平均年齢は高まっていた。

このような中、普及センターが、両会の会員をはじめ若者も含めた生産者を対象とする勉強会を開催したところ、若手生産者のグループ化の機運が高まった。

そこで、普及センターは、若手生産者の交流を促すため、両地域を網羅する新たなグループの設立を支援し、若手生産者が技術・経営力を研鑽する機会を創出する。

■ 活動対象

一関りんご研究会

■ 活動経過

(1) 一関りんご研究会の設立（平成 24 年度）

平成 21 年度に実施した勉強会をきっかけに、西磐井地域と東磐井地域の若手生産者が知り合い、グループ化の機運が高まっていた。

そこで、平成 24 年度は、若手生産者が参加しやすい勉強の場として、視察研修を企画した。この視察研修において、若者の交流が深まったことから、参加者を中心とする若手生産者グループの設立を後押しした。普及センターは、発起人の生産者と準備を進め、平成 25 年 3 月には、両地域を網羅する「一関りんご研究会」が設立された。

(2) 研究会活動の支援（平成 25 年度～平成 27 年度）

ア 新技術の実証

(ア)りんご樹体ジョイント仕立て栽培

会員の提案で実証圃を設置した。園地整備や管理作業、生育調査は、会員が集って意見を出し合い、創意工夫しながら進めた。普及センターは、技術指導や情報提供を行い、生育調査に協力した。また、想定どおり生育しなかった試験区があったため、計画変更の際には助言した。



ジョイント仕立て用の苗木を全員で管理



ジョイント仕立ての接ぎ木作業

(イ) 鮮度保持剤スマートフレッシュ™の処理
試験事例が少ない品種を処理し、果実品質を調査した。普及センターは、処理業者との連絡調整や調査の指導、試験事例の情報提供を行った。また、効果の程度と販売上の有利性について、会員の考察が深まるように意見交換を進めた。



処理した果実の品質調査

(ウ) その他新技術の実証

会員と普及センターは、役員会や全体会議で新技術の情報を共有した。関心が高いものは活動に採用され、普及センターは実証研究を支援した。これまで、枝幹害虫ヒメボクトウの被害対策や、硫酸苦土肥料による花芽及び葉色の改善実証などに取り組んだ。

イ 研修会の開催

優良園地や公設試験場の視察研修では、目的に沿った企画運営がなされるよう支援した。

また、鳥獣被害対策や経営管理手法の研修では、各担当普及員が講師を務めた。このほか、会員が個人的に受講した研修について報告する機会を設け、会員間での意見交換を促した。

■ 活動成果

(1) 若手生産者の連携

研究会設立時の会員は、男性9名、女性1名だったが、新たに男性4名が加入した。また、会員の妻が研修に参加する機会も増えた。さらに、会員同士が個人的に繋がり、生産及び販売に関する情報を共有する動きも見られている。

(2) 技術・経営力の研鑽

会員は、技術や情報を教え合い、理解を深めている。特に、樹体ジョイント仕立て栽培は、摘心や接ぎ木などの技術習得に役立ち、りんごの生育特性を学ぶ機会にもなった。また、経営管理手法については、習熟度に個人差があるものの、研修や情報交換を通じて疑問や課題を解決しようとする動きが見られた。



研究活動によって、新技術や新品種への関心が高まった。優良経営体の視察や経営管理手法の研修は、各自の農業経営を振り返る機会になった。

会員間の情報交換も有意義で、経営規模や品種構成、販売形態などの違いを知り、今後の経営方針や管理作業の参考にすることができた。

引き続き、会員が興味を持ったテーマを取り上げて活動していきたい。

所属職名：一関りんご研究会会長 氏名：三浦慶照

■ 協働した機関

一関地方農林業振興協議会

■ 一関農業改良普及センター

果樹振興チーム（チームリーダー：及川耳呂 チーム員：薄衣麻里子）、
執筆者：薄衣麻里子

小ぎく新規生産者の育成支援

【一関農業改良普及センター】

■ 課題名

体質の強い花き産地構造の構築

■ ねらい

栽培経験の浅い生産者に対して重点指導を行うことで、栽培技術の向上を図り、新規生産者の定着をねらう。

■ 活動対象

経験年数3年以内の小ぎく新規生産者9名

■ 活動経過

(1) 新規生産者の支援体制の整備

ア 生産振興推進員と新規栽培者のマッチング

JAいわて平泉では、小ぎくの産地拡大を目的に生産振興推進員制度を設置している。今年度の推進員委嘱式に合わせて新規栽培者を紹介し、最寄りの生産振興推進員が濃密に相談・指導に当たってもらえるよう要請し、了承を得た。

イ 生産振興推進員等と連携した定期的な個別巡回

部会行事として実施している全戸巡回時に、生産振興推進員とともに新規栽培者の圃場に巡回し、指導を行った。

(2) 経営目標の設定・達成支援

ア 経営目標達成に向けた指導会

個別巡回や指導会等により、各時期の栽培管理、個別の状況に応じた栽培管理指導等を実施した。

イ 個別実績相談会

栽培管理チェックシート・販売実績を用いて、各自の作業の実施状況や出荷実績を確認し、今年度の反省点や課題解決に向けた次年度の取組事項を明らかにした。

(3) 新規生産者のグループ化・交流支援

ア 小ぎくスキルアップ研修会

県内の他地域で取り組まれている省力的な定植作業等を視察した。本研修会には小ぎく中核農家も参加したことから、情報交換も行われた。

イ 小ぎく初心者研修会

近年、開花前進傾向であることから各種の開花調節技術が必要になっているため、キク類の開花生理の基礎と開花調節技術の要点について研修した。あわせて開花調節剤「エスレル10」の散布方法についても再確認した。

■ 活動成果

(1) 新規生産者の支援体制の整備

普及センター・JA等による個別指導が中心ではあったが、積極的に地域の生産振興推進員に教えを請い情報収集する対象者も見られており、生産振興推進員と連携した新規生産者の支援体制が定着しつつある。

(2) 経営目標の設定・達成支援

目標達成に至らない生産者が多かったものの、個別実績相談会等において各生産者の個別課題が明らかになり、次年度に向けて具体的な改善点を対象者と共有することができた。

(3) 新規生産者のグループ化・交流支援

省力化機械の視察、開花調節の基本について習得したこと、その場で生産者同士の情報交換や交流が行われたことで、栽培意欲の向上につながった。



昨年は記録的な高温乾燥気象に伴い、花き全般に開花期が前進化し、思うような生産・販売をすることができませんでした。小菊では短幹開花、ほうき咲きが原因で出荷できなかった物が多くありました。

そこで今年初めて、JA部会内でグループ討議を行い、栽培以外にも多くの課題があることがわかりました。

今後は普及センター・生産者と協力し、抽出された課題解決に取り組んでいきたいと思います。

所属職名：JAいわて平泉 営農部 園芸課 氏名：横田和樹

■ 協働した機関

一関地方農林業振興協議会、JAいわて平泉花き部会、小菊生産振興推進員

■ 一関農業改良普及センター

花き振興チーム（チームリーダー：阿部 陽、チーム員：鈴木 翔）

執筆者：阿部 陽

集合研修を中心とした集落営農組織の設立及び法人化

【一関農業改良普及センター】

■ 課題名

集落営農組織の設立と経営発展

■ ねらい

一関管内では、23の集落営農組織が法人化計画を有している。また、H30年までに9地区において、集落営農組織を担い手とする圃場整備事業の採択が計画され、うち4地区では集落営農組織が未設立の状態である。

こうしたなか、集落営農組織の円滑な法人化と基盤整備事業を契機とした集落営農組織の設立に向けて、各組織や地域の代表者が集落営農とその法人化に対する理解を深めるとともに、JA、市町、県農村整備担当部署などの関係機関と連携しながら、集合研修を中心とした集落営農組織の設立と法人化支援を行った。

■ 活動対象

法人化支援	特定農業団体等 13組織
集落営農組織設立	基盤整備事業計画地区 7地区

■ 活動経過

対象とする組織及び基盤整備事業予定地区では、法人化及び営農組織設立に向けた取組状況に差がみられることから、相談会等で状況把握を行ったうえで、集合研修により法人化・組織設立に向けた手順の理解と具体的な取組を促し、その後、個別フォローアップを行う活動を行った。

(1) 対象組織・地区の現状と法人化、組織化に向けた課題整理

ア 集落営農組織リーダーを対象とした個別面談

13組織の役員を対象とした関係機関(JA、一関市農政課、県農林振興センター、普及センター)による個別面談により法人化に向けた検討状況や課題等を確認し、法人化推進を希望する組織に対して集合研修への参加誘導を行った。

イ 集落営農組織設立に向けた個別相談会

関係機関(一関市農地林務課、県農村整備センター、普及センター)による個別相談会で、現在の各地区における営農状況や担い手の状況を確認するとともに、相談会後には、関係機関による検討会を実施し、地区別の課題や対応の方向性を検討・共有した。

(2) 集落営農法人化研修会及び集落営農組織設立研修会の開催

法人化計画を有している集落営農組織及び集落営農組織の設立を検討している地区を対象として集合研修を開催し(各4回のべ8回)、法人化研修会には11組織、組織設立研修会には8地区が参加した。

各研修では、組織設立や法人設立までの手順、経営ビジョンの検討、経営計画の試算等を演習中心に行うことで、参加者の理解を促した。

なお、それぞれの研修会では、関係機関の支援担当職員の参加を要請し、研修(グループ演習)のファシリテータを務めてもらうことで、関係機関職員の各組織・各地区の法人化、組織設立に対する知識を習得する機会とした。

- (3) 集落営農組織の法人化、組織設立に向けた個別フォローアップ
各組織の法人化設立準備委員会（2組織）や基盤整備事業推進委員会等（3組織）の座談会や説明会に出席し、法人化及び組織設立に向けた取組（事業目論見書の内容、事業計画、規約等の検討）のフォローアップを実施した。

■ 活動成果

- (1) 特定農業団体1組織の法人化、集落営農組織1組織の設立
法人化研修を受講した「中川農産」が法人化し（H28年3月設立総会）、組織設立研修を受講した一関市小猪岡地区に「恋の丘営農組合」が設立された（H27年8月）。
- (2) 関係機関が連携した効率的・効果的な支援の展開
関係機関職員が集合研修に参加することで、集落営農についての知識や設立、法人化の手順等の理解が深まり、効果的な支援を行うことができた。
特に集落営農組織の設立については、相談会から集合研修まで県農村整備担当職員と連携した取組により、担当職員の集落営農に対する理解が深まることで、営農組織設立が円滑に進み、基盤整備事業の円滑な推進にも寄与した。
- (3) 現状把握、集合研修、個別フォローアップという支援の流れを明確化
各組織や地域における取組状況はまちまちであり、支援機関が連携して状況把握することで支援に向けた方向性の確認と役割分担を明確化できた。
また、「現状把握⇒集合研修⇒個別フォローアップ」といった支援の流れを明確化することで、効率的に支援を実施することができた。
なお、法人化研修と組織設立研修について重複する内容があることから、研修会の統合を検討することとした。



集落営農組織設立研修では、一関農村整備センター職員もファシリテータ役を担うとともに、私自身も営農組織設立に関する知識を得ることができました。参加した各地区のリーダーからも、「営農組織のメリットや組織立ち上げに向けた手法等をよく理解できた。」といった声をいただいております。

地形など条件が厳しい中山間地域では、圃場整備の導入を契機に営農の組織化を図り、地域が一体となった集落営農を展開していく必要があります。

今後とも地元の支援が必要ですので、引き続きよろしくお願いたします。

所属職名：一関農村整備センター 技師 氏名：村上 紗紀

■ 協働した機関

一関市（農政課、農地林務課、各産業経済課、建設農林センター）、JAいわて平泉、一関農村整備センター、一関農林振興センター

■ 一関農業改良普及センター

担い手・農村活性化チーム（チームリーダー：千葉守、チーム員：東海林豊、村田就治、氏橋明子）

執筆者：村田就治